

職業行動に関する研究

— 志望職業にみる SDS 結果と選択要因の特徴 —

A Study of Vocational Behavior

—Characteristics of SDS Test's Result and Factors
related with Choice in Vocational Aspiration—

森 下 高 治

人間にとって、働くことは一体何であるのか。この課題、すなわち、労働・職業の意義は有史以来、人間が常にかかえてきた問題である。また、それは歴史的にも社会的にも大きく変化してきている^{註1)}。

先頃(11月)開催された働くことの意味(MOW-Meaning of Work)のシンポジウムでも、1977年以来取り組まれている国際比較の研究結果が^{註2)}論じられた。そのなかで、日本側リサーチ・チームの代表者である三隅教授(大阪大学)により、日本人は欧米の人たちに比し、仕事中心性(work centrality)が最も高いとの報告がなされた。この背景については、社会的、経済的、心理的変数など、さまざまな要因を十分に考慮しなければならないことが、このプロジェクトを進めている研究者によって指摘され、今後の研究に一層期待が寄せられている。

そこで、この MOW の研究にみられるように、人と仕事、人と職業の問題を扱うことは、極めて重要なことである。本研究ではこの点取り上げる対象は、在職者ではなく、就職前の具体的職業志望をもった学生群から職業にかかわる諸問題をとらえようとする。

職業選択理論について、ホランドは、類型学による6つのパーソナリティタイプと環境の問題を提唱している。この環境に対応するパーソナリティタイプは、ホランドの Vocational Preference Inventory (1958) とオースティンとホランドの Environment Assessment Technique (1961, 1963) によって操作的に定義づけられた。

氏は、1966年に次のような4つの命題を掲げた。

1. われわれの文化において、多くの人びとは、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的の6つのタイプのいずれかにあてはめることができる。これらのパーソナリティタイプは、個人と環境との相互作用のなかで形成される。

註1) 森下高治 1983 職業行動の心理学 ナカニシヤ出版 p. 1~3.

註2) 大阪大学 1983 国際シンポジウム 労働生活の価値意識と態度 大阪大学

職業行動に関する研究

2. 人が生活している環境は、同じく現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的の6つの環境モデルに特徴づけることができる。それぞれの環境は、同一のパーソナリティタイプの人によって殆ど占められる。

3. 人は自己の技能や能力を発揮できる環境を求め、また、彼らの態度や価値観が表現できる環境を求め、

4. 人の行動は、個人のパーソナリティと環境との相互作用によって決定される。

そのなかで、彼は考え方として、個人の生活史に関する発達の問題を考慮した。実際、人は成長する過程でさまざまな環境との相互作用を通して生きていくものである。特に、その環境面については、両親、兄弟等の対人影響の問題、また、学校や地域、職場環境が個人のパーソナリティタイプを作りあげるとしている。

本研究での具体的な課題は、まず今日、就職・職業への具体的な問題をかかえた学生が、将来の志望職業に対してどのような志向を示すか。すなわち、仕事・職業に対する活動性、能力などについて、これを SDS 職業適性自己診断テスト結果から分析を試みる。既に、Walsh ら(1976、1977、1978)は、在職者を対象に6領域に対応する代表的な職業従事者が、職業間で違いがあるのかどうか。また、領域間でも差異がみられるかを検討し明確な違いを見出ししている。これを本研究では志望者群からみる。

次に、具体的志望職業の進路選択にかかわる内的、外的要因の問題について、どのような要因が特徴としてみられるかを明らかにしようとする。

方 法

調査対象) 大学生を対象に、男子は Holland, J.L. の6領域(現実的～慣習的)に対応する具体的職業を6つ、すなわち、現実的領域の職業として自動車整備士志望群(以下、志望を略す)、研究的領域は研究開発群、芸術的領域はデザイナー(画家も含む)群、社会的領域は中学校・高校社会科教員群、企業的領域は営業群(販売係員も含む)、最後に慣習的領域は事務群の計6群である。

女子は、看護婦、保健婦、保母、小学校教員の専門的職業を志望している4群を選んだ。調査対象者数は、男子が5大学、経済学部、理学部など8学部、計417名である。女子は看護学科及び幼児教育学科の2学科、2短期大学、計254名である。

調査期日) 調査は、男子が1981年6、7月に、女子は男子の実施期日に加え、1982年10、11月にも行い、2期にわたり実施した。

調査方法) ホランド理論にもとづく日方式 SDS 職業適性自己診断テストと職業選択要因調査票を集団による一斉実施法で記入を求めた。

日方式 SDS テストは、Holland, J.L. が作成したものを日本版として、武田・森下により公表したものを用いた。それは、仕事に対する活動性、能力、職業興味、能力の自己評価①及

職業行動に関する研究

び②の計5側面からなり、総合得点結果から個人のパーソナリティ・コードが得られる。ここでは、当該志望職業を表明した対象者の総合得点結果を問題にする。

また、職業選択要因調査票は^{註3)}内的要因として8項目からなる性格特性評価、例えば、ささいなことが気になる一神経質、これを「はい」～「いいえ」の3件法で回答する。

7つの適性能力評価^{註4)}は、言葉をうまく使いこなしたり、文章の意味や内容を理解すること一言語適性など、「大変得意である」～「余り得意ではない」の3件法で回答する。

同じ内的要因を測定する項目として仕事の活動面での興味^{註5)}と職業・仕事の価値^{註6)}は、興味が機械的・技術的な活動から事務的・計算的な活動まで8つの活動のうち、最も興味ある活動を1つ、また、価値も給料が高いことなど10のことがらのうち、1つだけ最も重視するものをあげさせた。

一方、外的要因は、まず対人影響の程度をみるため、父親、母親、兄弟姉妹、友人、先生などの具体的対象を掲げ、影響を受けた程度を尋ねた。また、その人の仕事の取り組み方からといった影響の内容についても調査票で取り上げた。次に、外的要因の第2の項目は、子どもの頃の子どもが認知する親の養育態度を問題にした。統制的態度、受容的態度、男らしさ・女らしさへの期待の3つである。

さらに、家庭の経済的状態や親の職業をもとらえた。この他、個人的属性として進路の決定時期、当該職業の志望理由、女子のみについてであるが勤務意志などを調査項目に含めた。

結果と考察

1) SDS 結果による検討

男子—table 1、fig. 1 に結果を示すが、図表から6群はかなり特徴がある。そこで志望職業間に果して差異があるかを分散分析で試みた結果、6領域全てに差異 ($p < .01$) が認められた。次に、いずれの職業間に違いがあるかをみるため下位検定を行ったところ、自動車整備士、研究開発、デザイナーの各群は、他の5群との間に明確な違いがみられた。すなわち、現実的領域では自動車整備士群が最も得点が高く、研究的領域では研究開発群が、芸術的領域ではデザイナー群がそれぞれ得点が高く、他の群を大きく引き離している。しかし、営業群は教員群を除く4群と、事務群は教員群の他、営業群を除く3群との間に差異が認められた。特に前者の3群に比べると、事務群、営業群、教員群はこれらの間での差異は比較的小さいと言え

註3) 性格特性は実際の、熟慮的、神経質、活動的、支配的、社会的外向、秩序的、直観的の8特性からなる。

註4) 適性能力は言語、数理、書記的知覚、空間判断力、形態知覚、運動共応、手腕・指先の器用さの各適性能力を問題にした。

註5) 興味は機械、戸外、知的、芸術、対人、奉仕、管理、事務の8つの活動を取り上げた。

註6) 価値観は給料、仕事の安定、作業環境、人間関係、地位、社会的承認、自分にあった仕事、仕事の内容、自分の成長、その他の計10のことがらを設けた。

職業行動に関する研究

table 1 志望職業群別 SDS 総合得点結果及びF値 (男子)

領域	自動車整備士群 N=41		研究開発群 N=28		デザイナー群 N=21		教員群 N=27		営業群 N=37		事務群 N=33		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
現実的 領域	34.59	6.15	28.04	7.63	25.24	6.49	19.11	8.23	20.95	8.13	19.64	8.91	21.54 p<.01
研究的 "	21.80	9.16	35.07	6.09	21.95	7.80	24.00	9.67	18.38	9.44	21.24	9.02	31.03 p<.01
芸術的 "	19.51	8.19	17.46	8.86	31.24	6.29	26.41	9.48	19.32	9.01	21.42	8.33	88.96 p<.01
社会的 "	22.56	7.12	20.61	7.61	23.57	6.70	37.15	6.58	27.11	8.41	23.73	7.79	17.23 p<.01
企業的 "	18.24	7.69	13.75	6.91	15.62	5.94	26.85	9.64	28.22	8.29	19.30	7.88	16.59 p<.01
慣習的 "	13.07	5.27	17.75	7.02	11.33	3.80	21.81	9.31	22.14	8.77	25.61	7.63	17.24 p<.01

る。

全般には、これらの結果から職業間の差異は認められ、また、同時に当該職業内の6領域間のちがいがみられた。平均値からすると例えば、自動車整備士群は予想される領域の得点、すなわち、現実的領域の得点が最も高い。

女子—table 2、fig. 2 に結果を示す。図表から明らかのように看護婦、保健婦、保母、小学校教員の各群は比較的似かよっている。いずれもホルランドの職業領域からすると社会的領域に入るが、6領域のうち、現実的領域(p<.05)と研究的領域(p<.01)の2領域にのみ有意差がみられた。そこで下位検定

を試みた結果、保健婦群は保母群より現実的領域にすぐれ、また、保母群は他の3群より研究的領域の得点が低く認められた。これから、保母群は4群のなかで特に現実的、研究的領域に

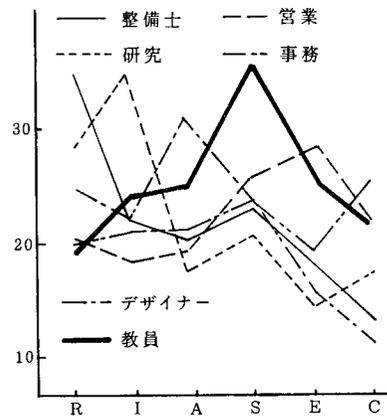


fig.1 SDS 総合プロフィール結果

table 2 志望職業群別 SDS 総合得点結果及びF値 (女子)

領域	看護婦群 N=83		保健婦群 N=21		保母群 N=33		小学校教員群 N=21		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
現実的 領域	13.86	7.37	15.71	7.04	10.79	4.53	12.76	5.76	2.68 p<.05
研究的 "	20.52	8.33	22.33	5.36	13.70	8.20	23.38	7.62	8.77 p<.01
芸術的 "	27.28	10.02	31.62	8.99	28.85	9.34	26.52	6.49	1.44
社会的 "	30.87	6.91	31.48	8.45	31.61	7.53	30.86	6.48	0.12
企業的 "	16.52	8.04	16.24	9.13	17.27	5.69	17.43	7.24	0.02
慣習的 "	19.42	8.14	19.38	8.35	19.21	7.18	22.29	6.89	0.83

職業行動に関する研究

得点が低く、目立った傾向を示し同じ社会的領域の職業とはやや異なった結果がみられた。

社会的領域の職業という観点から、当該領域の得点をみると、平均値が殆ど同じで興味深い結果が示された。ただし、上述の 保母群の結果や保健婦群が平均値で社会的より芸術的領域の得点がわずかに高いのもやや違った側面をのぞかせている。

2) 選択要因による分析

さまざまな選択要因のなかから紙幅の都合上、要因を絞って取り上げることにする。

男子—対人影響、養育態度、性格特性及び適性能力は分散分析により、他の質問の回答は多少でもって特徴をとらえた。

対人影響要因については、table 3 に結果を示す。表から兄弟と先生からの影響、それにその他の人からの影響が認められた。先生は教員群が、その他の人はデザイナー群が極めて影響が大である。デザイナー群は 22名のうち 10名のものがその他の人から影響を受けているとして、叔父の他、特定のデザイナー、画家をその対象にあげている。また、全般には父親の影響は強い。

次に、養育態度については、table 4 に結果を示す。表から父親、母親の統制的(干渉的)態度 ($p < .05$, $p < .01$) と母親の受容的態度 ($p < .05$) に差異がある。特に、母親の統制的態度は、整備士群と教員群が、受容的態度は 6 群ともその傾向は強いが、教員群により強くみられた。

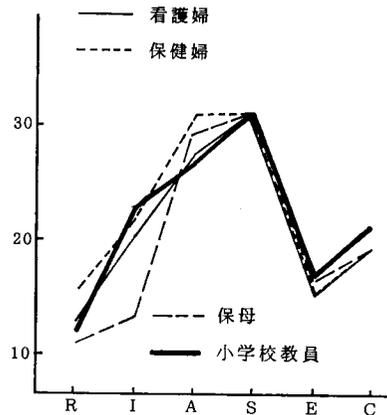


fig.2 SDS 総合プロフィール結果

table 3 対人影響要因の分散分析結果

対人影響要因	自動車整備士群 N=39		研究開発群 N=33		デザイナー群 N=22		教員群 N=31		営業群 N=37		事務群 N=34		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
父 親	2.28	0.75	2.25	0.87	2.32	0.82	2.32	0.69	2.25	0.83	1.94	0.76	1.06
母 親	2.82	0.45	2.75	0.43	2.68	0.55	2.55	0.61	2.65	0.48	2.52	0.61	1.68
兄 弟 姉 妹	2.83	0.44	2.90	0.40	2.55	0.72	2.47	0.72	2.57	0.69	2.76	0.55	2.61 p<.05
友 人	2.51	0.71	2.30	0.80	2.14	0.76	2.35	0.79	2.32	0.81	2.53	0.74	1.02
そ の 他	2.90	0.38	2.88	0.48	2.09	1.00	2.74	0.62	2.78	0.58	2.65	0.72	5.55 p<.01
先 生	2.77	0.48	2.18	0.90	1.91	0.90	1.77	0.83	2.68	0.62	2.71	0.67	11.02 p<.01

職業行動に関する研究

table 4 親の養育態度の分散分析結果

親の養育態度	自動車整備士群 N=39		研究開発群 N=33		デザイナー群 N=22		教員群 N=31		営業群 N=37		事務群 N=34		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
統制的態度 父親	2.28	0.71	2.33	0.84	2.64	0.48	2.52	0.62	2.68	0.52	2.26	0.74	2.34 p<.05
” 母親	1.82	0.59	2.70	0.52	2.05	0.56	1.81	0.64	1.92	0.75	2.06	0.59	9.18 p<.01
受容的態度 父親	1.79	0.69	1.52	0.61	1.68	0.76	1.48	0.62	1.73	0.64	1.74	0.56	0.09
” 母親	1.67	0.65	1.36	0.48	1.32	0.63	1.32	0.47	1.38	0.48	1.59	0.49	2.53 p<.05
男らしさへ 父親	1.82	0.67	1.76	0.82	1.91	0.79	1.71	0.73	1.73	0.64	1.74	0.61	0.29
” 母親	1.79	0.65	1.94	0.74	2.00	0.74	1.74	0.72	1.86	0.62	1.74	0.61	0.70

※ 対人影響要因の回答は、「影響を受けた方」を1点、「どちらともいえない」を2点、「影響を受けていない方」を3点に配点した。
また、親の養育態度は、「はいいつも」、「強く求めた」を1点、「はいときどき」、「やや求めた」を2点、「いいえ」「余り求めなかった」を3点とし平均値を求めた。

性格特性の結果は、table 5 の通りである。8つの性格特性のうち、神経質は研究開発群とデザイナー群がその傾向が大で、より神経質であることが認められた。支配性と社会的外向は、教員群と営業群が大、また、秩序性は事務群が最も強く、逆にデザイナー群は弱い。これからホランドが示す各パーソナリティタイプの特徴は、社会的タイプに入る教員群が、協力的、社会的、責任のある、援助的といった具体的な特徴を有していることから本結果と一致する。また、企業のタイプの営業群も、冒険的、権威的、社会的、自信のあるといった叙述が使われ、教員群と同様、一致した結果が見い出せた。慣習的タイプの事務群は、慣習的が規則正しい、慎重な、従順な、自己統制的で表されるため本結果の秩序性が大であるにおきかえられる。逆の芸術的タイプが想像的、感情的、秩序的でないといわれるが、デザイナー群は秩序性が小さいことから一致した結果がみられた。

table 5 性格特性の分散分析結果

性格特性	自動車整備士群 N=39		研究開発群 N=33		デザイナー群 N=22		教員群 N=31		営業群 N=37		事務群 N=34		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
実 際 的	1.49	0.55	1.55	0.70	1.64	0.71	1.39	0.55	1.38	0.59	1.41	0.60	0.74
熟 慮 的	1.64	0.77	1.39	0.65	1.50	0.58	1.58	0.75	1.51	0.72	1.24	0.55	1.52
神 経 質	1.72	0.78	1.21	0.54	1.32	0.55	1.68	0.82	1.76	0.82	1.79	0.76	3.51 p<.01
活 動 的	1.77	0.58	1.79	0.59	1.82	0.72	1.48	0.56	1.51	0.55	1.76	0.77	1.80
支 配 的	2.26	0.59	2.30	0.67	2.09	0.60	1.71	0.73	1.89	0.73	2.06	0.54	3.86 p<.01
社 会 的 外 向	1.69	0.72	1.79	0.73	1.59	0.72	1.29	0.45	1.14	0.34	1.50	0.65	5.46 p<.01
秩 序 的	1.77	0.73	1.36	0.54	1.86	0.63	1.58	0.75	1.59	0.64	1.21	0.47	4.43 p<.01
直 観 的	1.79	0.65	1.76	0.65	1.55	0.66	1.90	0.78	1.68	0.77	1.88	0.76	0.92

職業行動に関する研究

4つの内的要因のうち、最後の適性能力の結果は、table 6の通りである。各適性能力別の検定結果から、言語能力、数理能力、空間判断力、形態知覚の4適性能力に6群間の明確な差異がみられた。特に、言語適性は教員群がすぐれ、数理と空間判断力は研究開発群が他より大であった。また、形態知覚はデザイナー群が大で、強い特徴を示した。

table 6 適性能力の分散分析結果

適性能力	自動車整備士群 N=39		研究開発群 N=33		デザイナー群 N=22		教員群 N=31		営業群 N=37		事務群 N=34		F 値	
	M	SD	M	DS	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
言語能力	2.46	0.50	2.27	0.66	2.41	0.58	1.77	0.61	2.11	0.61	2.15	0.60	5.44	p<.01
数理能力	2.38	0.54	1.73	0.66	2.32	0.63	2.39	0.66	2.49	0.68	2.15	0.60	6.27	p<.01
書記的知覚	2.26	0.63	1.94	0.69	2.23	0.60	2.16	0.72	2.08	0.63	1.85	0.69	1.91	p<.10
空間判断力	1.95	0.64	1.61	0.60	1.86	0.76	2.00	0.57	2.08	0.67	2.35	0.59	4.79	p<.01
形態知覚	1.85	0.58	1.61	0.60	1.41	0.49	1.77	0.49	1.84	0.68	2.06	0.59	3.97	p<.01
運動共応	1.54	0.63	1.91	0.62	1.59	0.49	1.74	0.72	1.59	0.59	1.71	0.62	1.55	
手腕、指先の器用さ	1.67	0.73	1.64	0.64	1.77	0.67	1.94	0.76	1.92	0.63	1.88	0.76	1.14	

※ 性格特性の回答は「はい」を1点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を3点に配点した。また適性能力も「大変得意である」を1点、「まあまあである」を2点、「余り得意でない」を3点とし平均値を求めた。

志望理由をみると、興味ある、自分にあった職業が高い割合を示すが、6つの志望職業を多い順で示すと、デザイナー>研究開発>整備士>営業>事務>教員の順となる。デザイナーでは90%、一番低い教員が60%ほどである。これに対して、営業、事務は、ただなんとなくが10%程度、また、事務群はこれ以外に安定した職業であるとの理由が10%弱、教員群は興味ある職業が6群のなかで最も低いかわりに価値ある職業が20%を示し、他より目立っている。

また、志望職業の決定時期は、整備士と研究開発群は殆どが18才までとしているが、営業と事務群は18才以上が大勢を占めている。教員群は決定時期が高校と大学の両期にわたっている。本対象での教員志望群は、教員養成大学対象者は含まれていなく、一般大学で志望したものを取り上げた。

さらに価値観は、各群とも自分にあった職業・仕事であることが45~67%と重視する傾向を示しているが、デザイナーと教員群は、自分が成長していく職業であることが32%、26%であり、重視している割合が比較的高い。営業群は25%がよい人間関係が得られることを、事務群は27%が仕事・会社が安定していることに価値をおいている。

仕事の活動面の興味は、整備士群は機械的・技術的活動が77%、研究開発群は知的・研究的活動が58%、また機械的・技術的活動も33%占めている。デザイナー群は、全員芸術的な活動に興味をもち100%である。教員群は人と接する活動が30%、知的・研究的が26%、奉仕的16%、芸術的16%である。また、営業群は人と接する活動49%、戸外でする活動、芸術的な活

職業行動に関する研究

動、人を管理・監督する活動が各々14%である。さらに、事務群は事務的・計算的活動56%、知的・研究的活動12%の各割合を示すが、6つの志望職業のうち、教員群と営業群は特にさまざまな活動に対する関心・興味が多岐にわたっている。しかし、全般には各群の最も高い割合の活動をみると、当該志望職業を直接的に表す活動が含まれていると考えられる。

女子一まず、対人影響要因の分散分析結果を、table 7 に示す。表から母親と先生に差異(ともに $p < .05$) が認められた。下位検定では、4群のうち母親の影響は保健婦群が保母群より影響が大である。先生は、保母群と教員群がともに大で他の2群との間に明確な違いがみられた。これから、男女とも影響を受ける対象は志望群により異なった特色をもつことが認められた。

次に、養育態度については、table 8 に結果を示す。男子に比し、4群間の差異は少なく、父親の受容的態度のみ差異 ($p < .10$) を示した。特に、保健婦群が最も値が小さく、子どもの頃に父親がよく話しをきいてくれた度合が他より大であることが認められた。

table 7 対人影響要因の分散分析結果

対人影響要因	看護婦群 N=79		保健婦群 N=20		保母群 N=35		小学校教員群 N=22		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
父 親	2.57	0.67	2.58	0.67	2.55	0.66	2.43	0.66	0.27
母 親	2.25	0.85	1.70	0.84	2.41	0.77	2.23	0.73	3.29 $p < .05$
兄 弟・姉 妹	2.83	0.44	2.60	0.66	2.68	0.63	2.58	0.59	1.73
友 人	2.56	0.69	2.40	0.66	2.60	0.68	2.55	0.66	0.38
そ の 他	2.63	0.77	2.70	0.64	2.69	0.71	2.91	0.42	0.88
先 生	2.48	0.73	2.30	0.90	1.86	0.93	1.91	0.95	7.61 $p < .01$

table 8 親の養育態度の分散分析結果

親の養育態度	看護婦群 N=79		保健婦群 N=20		保母群 N=35		小学校教員群 N=22		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
統制的態度 父親	2.52	0.60	2.35	0.79	2.27	0.66	2.32	0.63	1.37
” 母親	2.09	0.72	1.95	0.59	1.94	0.53	1.86	0.63	0.91
受容的態度 父親	1.63	0.69	1.45	0.67	1.91	0.62	1.73	0.75	2.13 $p < .10$
” 母親	1.38	0.58	1.25	0.54	1.49	0.55	1.36	0.48	0.75
女らしさへの期待 父親	2.08	0.80	2.05	0.80	2.18	0.67	2.14	0.69	0.19
” 母親	1.99	0.79	2.20	0.68	1.91	0.65	2.09	0.42	0.82

※ 対人影響要因の回答は、「影響を受けた方」を1点、「どちらともいえない」を2点、「影響を受けていない方」を3点に配点した。

また、親の養育態度は、「はいいつも」、「強く求めた」を1点、「はいときどき」、「やや求めた」を2点、「いいえ」、「余り求めなかった」を3点とし平均値を求めた。

職業行動に関する研究

性格特性については、table 9 に結果を示すが、表から活動性、支配性、秩序性の3特性に差異が見い出された。3つのうち、活動性のみが $p < .01$ で、他は $p < .05$ である。下位検定では、活動性は保母群と教員群が活発であり、また、支配性も両群がともに大であることが認められた。しかし、秩序性は保健婦群が大であり、独自の特色をもつことが明らかになった。これから、同じ社会的タイプに入る4群ではあるが、保母群と教員群は、協力的、社交的、援助的といった特徴が本結果では活動性と支配性の性格特性に結びついた形で強く見い出された。

table 9 性格特性の分散分析結果

性格特性	看護婦群 N=79		保健婦群 N=20		保母群 N=35		小学校教員群 N=22		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
実 際 的	1.68	0.69	1.65	0.65	1.46	0.65	1.59	0.65	0.91
熟 慮 的	1.67	0.79	1.60	0.73	1.74	0.81	1.95	0.77	0.90
神 経 質	1.75	0.80	1.70	0.84	1.57	0.73	1.41	0.65	1.25
活 動 的	1.63	0.60	1.95	0.67	1.40	0.60	1.41	0.65	4.03 $p < .01$
支 配 的	2.22	0.63	2.50	0.50	2.09	0.60	1.95	0.77	2.90 $p < .05$
社 会 的 外 向	1.43	0.59	1.45	0.67	1.37	0.64	1.32	0.47	0.28
秩 序 的	1.71	0.77	1.35	0.57	1.86	0.72	1.77	0.60	2.83 $p < .05$
直 観 的	1.85	0.71	1.75	0.54	1.91	0.77	1.73	0.75	0.40

適性能力の結果は、table 10 の通りである。7つの適性能力のうち、空間判断力と形態知覚の両能力に差異 ($p < .01$, $p < .05$) があり、保健婦群は保母群よりすぐれていることが明らかになった。また、書記的知覚も差異 ($p < .10$) がみられ、保健婦群が最も値が小さく、他より得意であることが認められた。

table10 適性能力の分散分析結果

適性能力	看護婦群 N=79		保健婦群 N=20		保母群 N=35		小学校教員群 N=22		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
言 語 能 力	2.23	0.64	2.25	0.70	2.29	0.51	2.23	0.67	0.07
数 理 能 力	2.28	0.64	2.15	0.57	2.34	0.71	2.09	0.79	0.80
書 記 的 知 覚	2.16	0.64	1.85	0.65	2.29	0.51	2.23	0.60	2.26 $p < .10$
空 間 判 断 力	2.38	0.66	2.05	0.59	2.69	0.46	2.27	0.69	4.87 $p < .01$
形 態 知 覚	2.20	0.68	1.75	0.54	2.14	0.54	2.00	0.60	2.98 $p < .05$
運 動 共 応	1.96	0.58	1.90	0.70	2.09	0.55	1.82	0.57	1.00
手 腕、指 先 の 器 用 さ	1.84	0.72	1.85	0.79	1.94	0.71	1.73	0.75	0.40

※ 性格特性の回答は「はい」を1点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を3点に配点した。また適性能力も「大変得意である」を1点、「まあまあである」を2点、「余り得意でない」を3点とし平均値を求めた。

職業行動に関する研究

次に、志望理由の特徴をみると、看護婦群と保健婦群は社会的に価値ある職業だからが、それぞれ32%、35%を示し、興味があり自分にあっているからと同様、多くあげている。これに対して、保母群と教員群は興味ある職業であるからが71%と64%の割合を示し、極めて強い特徴をもつ。また、教員群は安定した職業であるからが30%弱で、教育職従事者と非教育職従事者の違いが明らかになった。

また、進路の決定時期は、看護婦群が中学校及びそれ以前の15才までの時期が37%、保母群が49%で割合は比較的高い。これら両群の決定時期は、幼年期から青年前期にかけての当該職業へのあこがれ、モデルとの同一視を含めたさまざまな選択要因の影響が考えられ、比較的早い時期での決定がなされたことによる。これとは逆に、同じ教育職でも教員群は高校時代の18才までが77%で極めて高く、同様に保健婦群においては85%と極めて高い。保健婦群の決定時期は、看護コースを履修した上で当該職業への就職が可能であるため、進路の決定時期は看護婦群より遅い。

価値観については、4群とも自分にあった職業であることから、40~60%あり、いずれの選択肢より最も多い。これ以外に保健婦群は、よい人間関係が得られることが35%を占め、他との違いをみせている。また、看護婦群は自分が成長していく職業であることに30%弱の割合を示した。看護婦群の結果は教員群が5%であるのとは対照的で、志望理由の教育職群の興味があるとの理由とも関連性がある。

さらに、興味的側面は人と接する活動が、保母群が最も高く57%を示すが、他の群も40%前後で比較的高い。これ以外に看護婦群と保母群は、奉仕的な活動がともに約25%で高く、保健婦群は芸術的な活動が30%で、人と接する活動につづいて関心が強い。

勤務意志は、保母群が生涯継続するに50%、教員群と看護婦群は約40%と高い割合を示すが、保健婦群は、継続より再就職の意志が55%である。また、看護婦群も再就職の割合が50%弱で高い。これに対して、教員群は結婚後やめるが45%で各群とも異なった意志を表明している。

ま と め

本研究は、まず SDS 職業適性自己診断テストを用い、具体的志望職業にみる SDS 結果について、果して志望職業群に特徴が見い出せるかを検討した。次に、それら志望職業群の内的要因、外的要因を含めた選択要因の差異を明らかにした。

1. SDS 結果による志望職業群の問題

男子を対象としたホランドの6領域に対応する6つの志望職業群について、各領域別の職業間の差異が分散分析により明確に認められた。あわせて、当該職業内のそれに対応する領域の得点も他領域より高いことが確認された。

女子は、社会的領域に入る専門的職業間の違いをみたが、差異は男子に比べ少なかった。た

職業行動に関する研究

だ、同一領域内の職業群においても、4群のうち特に保母群が他の群と少し異なる動きを示した。全般には、男子にみられるように領域別の職業間の差異は明確に示され、また、当該職業内での領域間の比較でも、予想される結果が得られた。これら結果は、ホルランドの6領域理論を十分認め得るものである。

2. 志望職業群にみられる選択要因の問題

内的、外的要因の影響について、男子では、対人関係要因が特に先生とその他の人に特色が認められた。すなわち、教員群が先生からの影響を、デザイナー群は叔父や特定のデザイナーからの影響がみられた。

養育態度は、教員群が母親の干渉的態度及び受容的態度に特徴が見い出された。また、性格特性の結果は、ホルランドによる各パーソナリティタイプの特徴と一致した結果がみられた。適性能力の結果も言語能力など4つの適性能力に差異が認められた。

さらに、志望職業に対する志望理由や志望職業の決定時期、価値観、興味的側面など、志望職業によって特色のある結果が見い出された。そのうち、志望職業の決定時期は整備士と研究開発群が、殆どが18才までとしているが、営業と事務群は18才以降で顕著な差がある。特に、営業群や事務群の志望理由が、ただなんとなくが10%程度であったことは、志望理由が極めて弱く、決定時期ともあわせ、これら結果が両職業群の差異が少ないという1の結果にもあらわれていると考えられる。

一方、女子は対人影響要因が、母親と先生に差異がみられた。母親のばあい保健婦群が、先生は保母群と教員群が影響が大であった。養育態度では、男子に比し4群間の差異は少なかった。性格特性の結果は、活動性と支配性が教育職群に特徴がみられたのに対して、秩序性は保健婦群がより大であった。また、適性能力も保母群が、空間判断力、形態知覚、それに書記的知覚にすぐれていた。さらに、志望理由の特徴からこれら4群は、看護婦群と保健婦群が一群として、保母群と教員群も一つにまとめられた。価値観は、保健婦群がよい人間関係が得られるに高い割合を占め、他との違いをみせた。

次に、具体的職業の決定時期は、保母群と看護婦群は15才までの時期が他より多く、また、興味的側面の特徴も両群は比較的似かよっていた。

勤続意志は、保健婦群が継続より再就職の意志が強くみられた。

これから同じ社会的領域に含まれる専門的職業であっても、個々の選択要因を取り上げたばあい各群独自の結果が一部みられた。すなわち、保健婦群のかなり異なった特徴や教育職従事者、それに看護婦群と保母群の類似性も見い出された。

文 献

- Bingham, R. P., & Walsh, W. B. 1978 Concurrent validity of Holland's theory for college degreed black women. *J. Vocational Behavior*, 13, 242-250.

職業行動に関する研究

- Holland, J.L. 1973 *Making Vocational Choices: a theory of careers*. Prentice-Hall.
- Horton, J.A., & Walsh, W.B. 1976 Concurrent validity of Holland's theory for college degreed working women. *J. Vocational Behavior*, 9, 201-208.
- 森下高治 1983 職業行動の心理学 ナカニシヤ出版
- 森下高治 1983 職業行動に関する研究 ―志望職業をとりまく選択要因の特徴について― 日本心理学会第47回大会発表論文集 早稲田大学
- O'Brien, W.F., & Walsh, W.B. 1976 Concurrent validity of Holland's theory for noncollege degreed black working men. *J. Vocational Behavior*, 8, 239-246.
- 大阪大学 1983 国際シンポジウム 労働生活の価値意識と態度 大阪大学
- 武田正信・森下高治 1981 日文化 SDS 職業適性自己診断テスト手引 日本文化科学社
- Walsh, W.B., & Horton, J.A. 1977 Holland's theory and college degreed working men and women. *J. Vocational Behavior*, 10, 180-186.